

都島だより

発行責任者
笹治 博司

〒182-0033
東京都調布市富士見町2-16-23 E-213
TEL 042-485-0446



関東浪速工業会 会報 2008年(平成20年)11月 第38号

事務局 馬江 治喜

〒234-0056
横浜市港南区野庭町696-6
TEL045-841-8885
E-mail uma2@m3.dion.ne.jp

題字デザイン 岡田宏三

NEWS38号

関東浪速工業会・現在会員数◆合計540名

◆M・機械112名、ME・機械電気22名◆A・建築97名◆E・電気・電子工学173名◆C・土木・都市工学49名◆C I・工業化学・理数56名◆L・普通12名◆工専19名

2009.1.23(金)

新宿住友ビル47階 東京住友クラブ

にて開催

平成20年度 総会のご案内



交通のご案内

JR[新宿駅]より 徒歩8分
東京メトロ丸ノ内線[西新宿駅]より 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線[都庁前駅] 直上



新宿住友ビル

本年度も昨年度と同じ新宿住友ビル47Fにて総会・懇親会を行います。同級生等お誘い合わせの上、多数のご参加をお待ちしております！

申込締切は平成20年1月10日です

- 親睦会費 8,000円(女性会員は4,000円)
- 平成年度卒業会員は無料!
- 同封の返信はがきに出欠を「記入の上必ず投函して下さい。」
- 日時 平成21年1月23日(金) 18時~20時30分
- 場所 東京住友クラブ

TEL:03-33344-6285

新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル47階

大抽選会開催



M科・ME科

A科

E科

C科・CI科



昨年度総会 集合写真

昨年度の総会御出席者

来賓	澁谷皓夫 理事長 木戸良樹 事務局長 近江巳記夫 元科学技術庁長官			
機械科	M18梅谷廣康	M18小川勝弘	M26上田英雄	M28橋本健治
機械電気科	M35国領 勝	M36西村 功	M42前田範行	M42山口忠雄
	M53増田幸生	ME40松本良治	清水一三雄先生	
建築科	A28酒井 保	A28森田幸博	A29森 正信	A37越田 勝
普通科	A37森 芳信	A38岩井浩一	A44水守恵子	A46三澤龍夫
	A57西井久人	A57信原利行		
電気科	E18/9平野榮一	E29岩崎亮平	E29小林孝榮	E35田中 浩
	E35芳仲 宏	E36赤尾仁史	E36石垣英明	E36笹治博司
	E36竹村繁幸	E36馬江治喜	E37岡本義輝	
土木科	C18/9大倉 馨	C18秋月勝美	C18北里直彦	C20榎本嘉信
	C20吉田正次郎	C24土谷 覺	C33明見和彦	C33松本信行
工業化学科	C134柴田孝次	C139馬場義南	C139藤田 忠	
	C140菅家亘通			
	44名+来賓3名 合計47名でした			

Mニュースカラー印刷 配布に関して



関東浪速工業会会長
E 36 笹治 博司

いつも関東浪速工業会にご協力いただき有難うございます。
さて、Mニュースを毎年、年二回(春、秋)発行して参りましたが今回で第38号を発行する運びに至りました。これも諸先輩方のご協力の賜物と深く感謝すると共に厚くお礼申し上げます。
この度、本紙38号より、「カラー印刷版」にて会員の皆様へ配布させて頂く事になり、ご案内させて頂きまます。今までの白黒印刷よりカラー化したことにより綺麗な紙面になった事と自負いたしております。どうか今後とも会員皆様のご協力を頂き益々の紙面充実を図りたく思っておりますので、ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

尚今ままでEメールで送付していた会員へも今回は印刷した紙面を送付いたしました。が、今まで通りEメールでの受信をご希望の方は、同封の葉書にその旨を記載して返送して頂きます様御願致します。

母校空襲罹災の記



M21 金田 龍之介

(昭和二十年六月七日)
(四十四年目の役者)より抄録

M21大前号からの続き

相変わらず、プロペラのリムを運んでいると、学校の生徒監から呼び出しがかかって来た。生徒監というのは、軍事教練の教官達や、武道の教官達がいる怖い部屋で、出かけて行って

「機械科四年生丙組、金田龍之介、岡本教官殿に、ご用があつて参りました」と名乗り上げると、岡本少尉が「よし」と言った。

この教官は、我がが一年生の時から教練を習っていた退役士官で、顔が黒く汚かったので、ゾッキン(雑巾)というあだ名で、紀州弁のなまりがあつた。

「八月一日より十日まで、学徒特別攻撃隊訓練がある、金田は都島工業代表として行って来い」と言われた。行く先は門真にある松下電工の寮であつた。

七月三十一日、再び学校へ行き、三八式歩兵銃とゴボー剣を借用して、それを今市の家まで持ち帰った。一面焼け跡となつた電車を、都島本通から高倉町、大宮町の城北公園の傍を、テクテク鉄砲をかついで歩くのだが、何しろけだるい夏の午後のごとで、今ならさしずめ反戦映画の少年兵のような姿である。それでも、いささか得意な気分なきにしもあらずで、こうして鉄砲持つて歩いてる姿を、誰か見てくれないかなと思つたりもしたが、焼けた電車道ではあんまり人には出逢わなかつた。

由良君の家へ着いてから、しばらくして空襲警報が出て艦載機が来襲し、ボンボン撃ち出した。機銃掃射という奴で、まったく気持ちが悪かつた。お母さんは、押し入れの中に隠れ、私は机の下に

俳優 金田 龍之介氏(M21卒)のホームページのURLですー www.geocities.jp/kinryu_doozi/

もぐり込んだ。どうしていいかわからず、ボンボンと大きな音だけが聞こえて、今にもこの家の壁を突き破つて、機銃弾がグサリとお腹に突き刺さるのではないかと、敵が上空を勝手気ままに飛び回っているのが、心がまえも何もできなかつた。やがて、敵機が飛び去つた後、押し入れから出てきたお母さんと二人で「怖かつたですね...」と大笑いした。

八月一日朝門真の松下電工に出かけて行った。大きな看板が下がった門だけある感じの工場で、やたら広い空地に草がはえて、その後ろの方に沼のようなものがあつた。

その広場の中にあるバラック建ての寮が、集合場所であつた。大阪府下の大学高専中等学校の代表が一名づつ来ていた。二百人位いたであろう。都島工専からは電気工学科の先輩が来ていた。この人は勉強家で、評判の高い秀才であつたが、あまり教練の演習には向きそうもないような、ヒョロヒョロの体をした、度の強い眼鏡をかけた人であつた。

定められた寮には、各校代表が四、五人づつ、部屋に入れられた。私の部屋には、泉尾工業の北村君という、能勢の山の中から来た類つべたの赤い、エビスさんのような、顎のしゃくれた少年が先に入つており、すぐ友達になつた。

集会場では大阪商大の学生が指揮を取つて敬礼した。教官は老陸軍少佐と、もう一人、陸軍中尉だが、なんだか薄つぺらな、頭の小さな軍人であつた。阪大臨時医専から外人のように色の白い学生が来ていた。指揮を取つた大阪商大の学生は、背は低いがガッチリして、後で驚いたことに、教官の軍事訓練の講義が始まると、大判の大学ノートを出して全部筆記した。とにかく一言半句もらさぬ様子で、サラサラと速記するように講義を書き取つて行くのである。大学の講義は、ああやつてノートするものなのだなと思つた。

池田の園芸学校の学生は、大柄で赤い顔をして

肩を左右にのつしのつしと振つて、廊下せましと歩く男であつた。

今宮工業から来た学生は、浪花節が上手であつた。演芸会は毎日演習から帰つて来るとやらされるのであるが、広沢虎造の「石松三十石船」をうなり、みんなに大喝采であつた。わが先輩は「超音波で歌、うたいませう」と

と挨拶したので、何を歌うのかと思つて見ていると、口をパクパクさせて、あつげにとられていると、



「超音波は耳に聞こえへんもんや」という説明を笑いながら言つて降壇した。一番先に驚いたことは、便所であつた。むろん水洗ではなく、便所へ入つてしゃがむと、下からワーンというなり声が聞こえて、いつせいに蚊が襲いかかつて、たちまちにして棒で殴られたような痛みを感じた。ワーツと思わず飛び出しそうにも何もどうにもできなかつた。しまいいには慣れて、腰を下させながら、タイミングをはずした。

学徒特攻隊訓練は、二米くらいは棒の先に、四角い土方弁当ほどの爆弾をくりつけ、戦車が一番弱いキヤタビラの部分を爆破し、肉弾でやつつける戦法であつた。これを破甲爆雷攻撃といつた。大八車をゴロゴロ押し、坂道を駆け上がつて来るのを、草むらに隠れていて、その棒を持つて近づいて行き、腹這いになつて、ヤツとばかり大八車の車輪の所へさし出すのであつて、それでこちらも終わりとなる。それを、夏の日のカンカン照りつける枚方の丘陵地帯で朝からやらされ、くたくたになつた。もう一つは、敵味方にわかれ、鉄砲を持つて、白兵戦であつた。山を走り、林をぬけ、とにかく泥の中へ飛び込んだり、腹這いになつてやるゲリラ戦であつた。一度びっくりしたのは、教官が、指揮官になつている大阪商大の、例の速記の学生さんに、この指揮はどう取るかという質問を発したら、その学生は悠々と腰に下げていた将校カバンの中から大学ノートを取り出して、ゆっくり開いて、ペー

ジをくり出したので、中尉の教官は「馬鹿、いちいちノートを見ないで答えんか!」と怒鳴りつけたが、私はこの学生は、大物だなあと感心した。わが先輩は、二、三人の部下を連れ(中等学校生は、大学専門学校生の部下であつた)斥候に出て、雑木林の中に迷い込み、集白ラツパがなつてもなかなか出てこなかつた。やがて、くたくたになつて現われ、泥だらけで他の中学生達と、ほどけたゲートルを気にしながら駆け足で帰つて来た。整列して、教官に敬礼したのだが、見ると学生帽の縁がない。これが、帽子はあこひもでちゃんと止めていたのだから、実に妙な感じがした。度の強い眼鏡をかけ、泥だらけで縁のない帽子で敬礼しているブキツチヨな学徒兵。学校きつての秀才といわれる先輩がうすつぺらな教官に怒鳴りつけられているのは、気の毒であつた。こういう頭脳のいい人に教練させることはねえじゃねえかなどと、心の底で思つたものだ。

次頁へ続く

関東青葦会主催 「江戸東京たても園と玉川上水散策」に参加して

A37 越田 勝

10月18日(土)午前9時半にJR武蔵小金井駅に集合、幸い快晴に恵まれ9名が参加しました。先ず江戸東京たても園に向かいました。東京にあった歴史的に価値のある建物をこの場所に移築、保存し貴重な文化遺産として次代に継承しようとの目的で運営されているもので、敷地面積は約7ha、武蔵野の面影を持つ広大な緑地の中に建物が展示されています。なお、この施設は江戸東京博物館の分館として建設されたこととです。

建築家・前川国男邸はじめ高橋是清邸、会水庵(茶室)、天明家(農家)、小寺醬油店等々、いろんな階層に属する人びとの住まいや建物が展示され、いずれも歴史的な価値を持つてお

2面より

り、非常に興味深い体験となりました。展示室には日本全国で展開されている歴史的景観を保存する運動の様子が展示されており心強く思いました。ヨーロッパの都市の景観の美しさを誰も否定できないと思いますが、その背後にはヨーロッパの人々の想像を超える日常の努力と知恵があることを思う時、こういった日本の歴史的景観を守る運動が力を増すことを願います。個人的な感想ですが、数年前、茨城県の桜川市の真壁町というところに行きました。歴史的建造物が数多く残された非常に興味深い町と感じましたが、たても園の展示にはありませんでした。何故でしょうか？これは個人的な今後の興味です。

昼食の後、江戸東京たても園の前を東西に流れている玉川上水に沿って設けられた遊歩道を歩きはじめました。この水路は、三代將軍徳川家光の時代から計画され、江戸の人口急増に対処するため一六五三年四月四日に着工され、二四八日間の工事で多摩川羽村取水口から四谷大木戸まで高低差九二m、全長約四三kmを完成させた上水路で、江戸・東京の都市給水を支えた水路です。水路の両側の植物、野草、小鳥の鳴き声、水路に放たれた立派な鯉が悠々と泳ぐ様などを楽しみながら歩きました。惜しむらくは水路の両サイドの草木の背が高く且つ、良く手入れがされていないため水路が見えないのが残念でした。京都の哲学の道(銀閣寺から永観堂を越え南禅寺にいたる道)と比べるとは酷か？いや、武蔵野の荒々しさが感じられて良いかも知れないとも思ったりした。

江戸東京たても園から吉祥寺駅まで約七・五km、吉祥寺駅まで歩き続けられるか不安を持つ人もいましたが、全員無事に吉祥寺駅までたどり着きました。吉祥寺駅界隈での懇親会では、ワイワイガヤガヤと歓談し、楽し

いひと時を過ごしました。適度の疲労感を感じながら家路につきましました。



江戸東京たても園にて
参加者(9名)
E35田中、C140菅家、A28酒井、A29森正信、A37越田、A37森芳信、A38岩井、A45田辺、A57信原



前川国男邸

青嵐会 関東青嵐会 懇親会に参加して

E36 竹村 繁幸



10月10日(金)東京築地市場の中にあるお店で、平成17年10月以来三年ぶりに懇親会を開催いたしました。今回は小林会長を含め、フルタイム勤務されている方が数名おられましたので、「平日の夜」に開催したためか、出席者が予想より少ない懇親会となりました。しかし三年ぶりの会合で、久しぶりにお会いすることができ、各自の近況をお話していただき、お互い健康を確認して楽しい一時を過ごしました。今回の参加者は10名(29年卒3名、35年卒2名、36年卒4名、37年卒1名)でしたが、一番若い人でも37年卒の岡本氏で、このような同窓会に関して如何すべきかを考えさせられることでした。来年は夏に開催しようという話がまとまり、散会し、雨の中家路につきましました。



関東青嵐会懇親会

陶芸会に参加して

A57 中谷 卓司

平成20年9月27日(土)に開催されました青嵐会恒例イベントの陶芸会に参加させて頂きました。私は東京に赴任して約5年弱になりますが、東京で初めて青嵐会のイベントに参加でしたが、A46卒の陶芸家の柚木寿雄氏を初め、先輩方にはお世話になりました。ありがとうございます。先輩方は皆、陶芸を経験されており、素晴らしい出来の作品を創作されており大変感動致しました。私はなんとか、ピエグラスらしき作品(笑)を奮闘の末に作る事が出来ました。あとは、焼き上がりを楽しみます。

陶芸終了後、柚木氏を迎えての懇親会の席でも和気藹々と楽しく貴重な時間を過ごさせて頂きました。また、貴重な話も聞くことが出来て感謝を致しております。今後もこのようなイベントに参加して親交を深めさせて頂きたいと思っております。最後に、幹事である同期の信原君にも色々お世話になり感謝しています。



レクチャーを受ける中谷氏



陶芸会でのスナップ
(左側がA57中谷氏・右側がA57西井氏)

参加者(9名)
E36菅治、E36竹村、C140菅家、A28酒井、A28森田、A37森、A57中谷、A57西井、A57信原



秋季 ゴルフコンペの報告

E36 竹村 繁幸

秋季ゴルフコンペは、平成20年11月6日(木)穏やかな絶好のゴルフ日和に恵まれ、千葉県野田市のクリアビューゴルフクラブにて開催しました。気鋭の初参加者を含め、12名の参加を得て、ナイスショットあり、チョロショットありの楽しい1日でした。優勝は2年ぶり2回目の岩崎さん(E29卒)でした。おめでとうございました。



秋季ゴルフコンペ

順位	お名前(卒年)	GRS	HC	NET	賞
1位	岩崎亮平(E29)	99	22	77	賞 大波
2位	明見和彦(C33)	92	14	78	DC
3位	西井久人(A57)	100	20	80	
4位	大川和雄(E29)	99	18	81	小波
5位	前田龍行(M42)	107	26	81	DC
6位	多賀松男(E42)	92	10	82	BG, NP
7位	菅家直通(C140)	108	26	82	
8位	細川俊(E36)	106	23	83	
9位	藤田忠(C139)	101	17	84	
10位	笹治博司(E36)	101	15	86	
11位	竹村繁幸(E36)	97	9	88	NP
12位	酒井保(A28)	124	28	96	

納涼屋形船に参加して

A57 信原 利行

平成20年8月7日(木)午後六時、浜松町の高速道路下にある乗船場「竹内」より屋形船に乗船当初は船一艘の貸切が危ぶまれましたが、最低貸切人数の15名がどうにか集まり、楽しい夏の一時を過ごすことが出来ました。出港後レインボーブリッジをくぐり、お台場にてエンジン停止。窓を開けると海上の涼しい風が船内を通り抜け、すこく爽やかな気分でした。料理は刺身盛り合わせと揚げたての天麩羅がとても美味しかったです。



屋形船内にて



シルク・ロード 天山北路を往く(第4回)

最終回

A27 田中 瑛也



シルク・ロード



● 地上の楽園、地下の帝国

華清宮 シルク・ロードの東の起点都市長安。現在の西安(写真1)は中国内陸部の経済開発の一拠点として、高層ビルの建ち並ぶ現代都市としての装いで、由緒ある歴史的建造物もその面影を失いつつある。この西安の近郊に唐の時代、玄宗皇帝と楊貴妃との艶聞の舞台として世に知れる「華清宮」がある。この建造物の祖は、周の幽王が愛妃を伴い湯の沸き出るこの地を好み酒宴をしばしば催したことに由来する。唐の皇帝玄宗(七一―七五六)はここに宮殿を築き「華清宮」と名付けた。繁栄した平和の治世、皇帝は楊貴妃を寵愛し政治を顧みなかった。しだいに政權は退廃していった。詩人白居易は「春寒くして浴を賜う華清池」と「長恨歌」で詠み、同時代の詩人杜甫もまた「朱門に酒肉臭く路には凍死の骨あり」と世を嘆いた。A・D七五五年「安史の乱」で玄宗の目の前で世の衰退の因となった、楊氏一族の惨殺、楊貴妃も38才の若さで世を去る。前世紀一九三六年の国共合作当時、蒋介石はこの宮を軍事拠点の居として構えた、史実も知られる。朱門の正門をくぐると、華清池の正面に白い艶めかしい現代彫刻の楊貴妃の立像(写真2)が、立ちほだかる。中国建築を特徴づける朱塗りの宮殿が池を囲み、楊貴妃



写真1(現在の西安)



写真2(華清池と楊貴妃の立像)

が浴したと伝えられる「海棠湯」皇帝に仕えた高官が入った「尚食湯」、その他多くの湯が遺されているが、全て石造りで入浴は、木の香薫る日本人の温泉浴気分の思いとは異なる。
兵馬俑坑(写真3) この華清池から東へ小高い丘、秦の始皇帝陵にほど近く、一九七四年三月に農民が井戸を掘っている時に偶然発見した兵馬俑、この発見が端緒となりその後中国考古学院が本格的発掘を進め、今日大規模な博物館を築き、兵馬俑を展示出来るに到った。今後も更に発掘が進められ、兵馬俑坑の規模の拡大が予想される。秦の始皇帝は、死後も自己の築いた帝国の不滅を信じて、自己の遺体とともに副葬品として兵士と馬の副葬品を造らせた。像の下半身には、土を詰め、上半身は空洞、典型的な木型で人物を作り、個々の人物像に細かく手を加え、十人十色の人物群像を制作した。この博物館の規模は、一号坑、二号坑、三号坑、銅馬車館からなる。一号坑は、東西二三〇m、南北六一二m、五mの坑道に約六〇〇〇体の兵馬が直立し、二号坑は、方形の陣営に歩兵隊は弓を持ち、戦車隊とあい並び、矩形の陣営には戦車隊と歩兵隊の混成、矩形の陣営として編成した騎兵隊、三号坑は作戦司令本部の布陣を担ったと推測され、銅馬車館に展示されている銅を素材にして造られた車馬の精巧さと藝術作品の域に達した美しさに驚歎した。後世中国の史家、司馬遷が彼の名著「史記」で秦の始皇帝陵の四方、東にこの兵馬俑坑、西に銅馬車群、北に宮殿が存在した述べたが、

この地下宮殿の存在は、古代中国の歴史への人々の関心をいやが上にもたかめ、今後の発掘調査に期待が寄せられる。永遠の靈魂の存在を信じた始皇帝の強固な信念、クレオパトラが楊貴妃かといわれた歴史上に名を遺す美女と玄宗皇帝とのロマンと、中国歴史上の人物の遺した史跡との邂逅にシルク・ロードの旅の充実感を満喫した。



写真3(兵馬俑坑)

● おわりに

シルク・ロード、天山北路と本文の題を掲げたが、今回の紀行では北路の何分の一の路しか辿っていない。本文でも触れたが、この地で行った中国の風情は、日本人が中国とはこんな国と抱く見事に固定観念を覆す。欧米人は指摘するが、我々日本人は日本に居れば、気付かない多様な日本人の風貌、日本人のルーツは、南方渡来説、大陸渡来説など、多々あり論争は絶えないが、中国からの渡来説は同じ漢字圏であり、この説に信を置くとして、華やかに唱えられる騎馬民族の渡来説にも論拠を与えるならば、この地に出会う人々の多くに日本人と覚しき風貌を見た。国を越えて言葉は異なるが、同じ人種のルーツであろう出会いは互いに親近感と呼び、心を通わせ充実した旅の時を過ごさせた。主として歩んだ新疆ウイグル自治区、現在はイスラム教を信仰する人々が、過半に居住するがかつては、インドとの仏教を中国へと伝来せしめた路として、役割を果たした今日の東アジアの民族の精神的支柱となっていたことの意味は大きい。加え

て今日の中国にとつてのシルク・ロードは、精神性をここに見出すと共に、エネルギー資源の開発の地として当地を認識している。トルファンからウルムチに到る沙漠の地に設けられた広大な風力発電の風車群、地下に眠る多量の石油、天然ガスの開発と中国のめざましい経済発展の礎となる資源の宝庫なのである。多様な顔を持つシルク・ロードとの再会の思いはつる。(完)

「シルク・ロード天山北路を往く」の連載はこれで完了ですが、田中瑛也氏より続編の紀行関連原稿を載せております。乞うご期待ください。広報担当より

関東浪速文庫 書籍貸出しのご案内

事務局より

会員の方が発行された著書等をお預かり致しております。閲読をご希望の会員は事務局までご連絡下さい。なお著書の郵送代は閲読希望者負担とさせて頂きます。また会員が発行された著書及び母校の歴史等に関する書物などを、当会へ寄贈していただける場合、事務局までご連絡をお願い致します。



- ・ジャワ派遣部隊宣伝班従軍記 E14卒 松尾 嘉雄氏
- ・回顧録 わが変容イ・ビジネスから哲学へ M18年9月卒 片井 振武氏
- ・死へのさすらいマニラ東方山岳戦の記録 都工50年史私の都工史 A13卒 奥山 清治郎氏
- ・都の葦 第5輯 温故智新
- ・都の葦 第6輯 神々の世代
- ・石井一郎氏著「M26上田氏より寄贈」
- ・地中海文明の源流をたずねて
- ・東南アジア仏蹟の回廊を巡りて
- ・ヨーロッパへの眼差し
- ・人間と文化

A27卒 田中 瑛也氏著

訃報

M20 京井 勲氏
平成20年1月24日ご逝去
謹んでご冥福をお祈り
申し上げます。

次号の
Mニュースは平成21年5月
発行予定です

原稿随時募集中!
事務局まで
送ってください!